

学会発表渡航支援報告書

氏名：瀬戸・徐・映里奈（せと・そ・えりな）

所属・職名：京都大学大学院農学研究科生物資源経済学専攻・博士後期過程

発表題名（英語）：The human network of the resettled Vietnamese refugees through
“securing daily meals”. A case study of Hyogo Himeji-city in Japan

著者名：Erina Seto-Seo

会議名（英語）：The 4th Next-Generation Global Workshop The Nation-States and
Beyond: Private and Public Spheres under Globalization

開催地（国、市）：大韓民国 ソウル市

参加期間：2011年11月24日～11月26日

報告者は、学会渡航支援をうけ 2011年11月24日～26日に大韓民国のソウルで開催された The 4th Next-Generation Global Workshop に参加した。このワークショップは、渡航支援を行っている京大 GCOE の本プログラムが主催となっており、「親密圏と公共圏」に対する理解と知識を高めることを目的として実施されている。また、若手研究者の育成についても配慮されており、国際間はもちろんのこと世代間においても、活発な意見交換の場となっている。4年目となる 2011 年の本ワークショップでは、「国民国家を超える：グローバル化下における親密圏と公共圏」というテーマが掲げられ、労働問題やジェンダー、移民、アイデンティティなどの様々な分野から各国・各地の状況について報告がなされた。まさにグローバル化下における各地域の変容を互いに認識しあい、研究の質を高めあう場になったといえる。

報告者は「migrating within Asia」というセッションで、発表を行った。

報告内容は、日本に定住しているベトナム難民たちが日本で生活を行う際に、どのように自文化の「食」を再現できる食材を手にいれているのかについて着目し、彼らのネットワークを明らかにするものであった。欧米に比べてエスニック・ビジネスが未発達な日本では、ベトナム食材で利用している食材を手に入れることは難しい。しかしながら、自文化の「食」は再現することは1世代にとっては慣れ親しんだ味を食べたいという欲求を満たすために必要なことであり、2世以降を含むコミュニティにとってはアイデンティティ形成の問題ともつながってくる。彼らのベトナム食材を確保しようとするネットワークを明らかにすることで、彼らの日本社会で構築してきた同じエスニック集団にとどまらない関係の構築や生活基盤の形成を考察した。

ベトナム難民は様々な国に定住しているが、国の受け入れ政策によってその後の生活が大

きく左右される。日本独自の状況と聴衆者の出身国との違いについての意見や「難民」という言葉がもつ定義の難しさ、在日ベトナムコミュニティの食の確保におけるジェンダー役割など、今後の研究の枠組みを考えていくうえで非常に示唆的なコメントをいただいた。

セッション全体から考えると、移住者の日常生活について取り上げた研究は少なく、報告者の発表は若干異色の感もあった。国境を越える人の移動についての研究は、事例研究も多数あり量の多さを指摘されることが多い。今回のワークショップへの参加を通して、経済や政治状況によって一元的に捉えられるものではないということを改めて感じさせられた。自身の研究も、単なる事例研究に終始しないように努めなければならないと鼓舞されるセッションであった。

